

日中戦争の頃

八 並 瑞枝子

野方四丁目

防毒マスク

校庭の二宮金次郎の像のわきに、六人の同僚が並んで立っている写真があります。その中の三人が防毒マスクをかぶっているのだけだったかわかりません。ボール紙を四角に組みたて、目の部分にはセロハン紙がはられ、鼻のところには小さい箱がついていて、中には消し炭を砕いたものが入っておりました。

先日野方小学校の古い先生たちの集まりがあったときいたら、ぼくが設計して図面を引き、先生たちが試作品を作ったかぶってみたのだと、当時新卒で若かった、今は本郷で医療機器の会社を経営している先生がいました。そんな物が実際に使えるところはおもわなかったけれど、戦意昂揚のために生徒にも作らせたとのことでした。

紀元二千六百年

庭の梅の木は五〇年以上の古木なのに、今でも美しい花が咲き、数は少ないけれど実もなります。昭和十五年十一月十日に区内の小学校では、皇紀二千六百年の式典を行い、氏神様への

祈願や奉祝旗行列がありました。北原小学校の二年と一年に在学していた長男と長女は、記念の梅の木を頂いて庭に植えたのですが、一本だけが花を咲かせております。

その頃、貯蓄や国債を買うことがなれば強制的に行なわれ、二千六百年記念の貯金も割当てられました。私の古い手箱の中に、梅の木と同じ年月を経た支那事変割引国債や、報国と書かれた証券などがあり、昭和十八、十九年のもありますが、十三年、十五年のものが多いようです。五円とか七円五〇銭とか十数枚ありますが、今では屑同様でもあり、記念品でもありません。

子供たちは貯金と共に古釘拾いにも精をだしました。毎月一日の興亜奉公日には、隣組を中心に廃品回収をして高射砲献納の資金に当てました。

砂糖やマッチ、米など次々と配給制度になって耐乏生活ははじまります。木綿の手ぬぐいをお年始に頂いたりすると、今で

も使えないで後生大事にしまいこんでしまうのは、衣類がスフばかりになってしまつて、純綿は貴重品でしたから、手ぬぐい一本でも惜しくて使えなかつた五〇何年も前の、戦争の頃の後遺症だと笑うのですが、ほんとうは笑うことができない心の深い傷ではないでしょうか。

学校では男生徒は在郷軍人から銃剣術の指導を受け、女生徒はなぎなたが必修科目になりました。女の先生はなぎなたの講習を受けて、俄か仕込みの指導者になりました。マイクを使うなどということはない頃でしたから、校庭のすみまで響きわたる号令をかけていました。

満蒙開拓青少年義勇軍

昭和十六年に野方小学校高等科の生徒が八名、満蒙開拓青少年義勇軍に入隊しました。担任だった大町寅夫先生は一家をあげて参加し、東京隊の隊長となりました。大町先生の長男は北原で私の長男と同級で仲よしだったらしく、一年の時の作文に大町くと遊んだことが書かれております。

茨城県の内原訓練所で軍隊と同じような訓練をうけて、三か月後には満洲黒河省に向かいました。翌十七年には六名の生徒が入隊しています。「君国の為に身を挺して満洲の野に墳墓の地を築く愛国の勇士」として、壮行会が行なわれたとのことですが、大町先生のご一家や、十四名の生徒たちの消息を知る由もなく心残りです。

太平洋戦争突入後

昭和十八年四月、野方国民学校の高等科が独立して城西国民学校となり、戦時中とはいえ立派に新築された校舎に引越しました。現在六中の校舎の前身です。

その頃、区内の小学校には防火のための貯水槽兼用のプールが次々とできております。当時北原国民学校の四年生だった長女の作文によると、「昭和十八年七月十八日から水練場を使いはじめ、九月には水練大会があつて、私は早泳ぎで一番になった」と書いております。のしとか平泳ぎという言葉が出ておりますから、プールを水練場といったように、クロールを早泳ぎといったのでしょう。五年生の長男の作文によると、「北原国民学校の運動場は、一年の時は木が少しと鉄棒があるきりだったが、紀元二千六百年には、記念園に木がたくさん植えられ、砂場もでき、楠木正成の銅像もおかれた。貯水池ができて火事や空襲のそなえとなり、夏には水練場となつて泳げるからうれしい。でも防空壕をほつてからは、運動場はますます狭くなつてしまつた」と書いております。

新しい校舎に引越したものの、城西国民学校の生徒たちは、ここで落ちついて勉強できたのは短い間だけでした。十二月八日は大詔奉戴日たいしよほうがいで、全校生徒が梅干しだけのおかずの「日の丸弁当」を持って、野方から明治神宮まで往復歩いて戦勝祈願をしました。弱音を吐くと非国民といわれますから、皆がんばつ

て歩きました。昭和十八年七月に久米川の林の中で二泊三日の野外訓練をした時の写真があります。

炊飯、銃剣術、手旗信号など軍隊同様の訓練をしたのですが、生徒の写真は一枚もなく、雑木林の中に張った天幕を背景に、八人の男の先生が、戦闘帽をかぶり、よれよれの国民服を着て足にはゲートルを巻いております。身構えて兵隊のようなきびしい顔をして木の枝を銃代りに持っております。女は私だけで、小使いさんと普通の格好をしていました。男生徒だけの訓練だったようです。

十一月に多磨墓地に遠足にいった時の写真もありますが、男の先生はゲートルを巻いて兵隊の格好で、女の先生は国防色のスフの上衣を着ております。この時も生徒の写真がないのが不思議です。

勤労働員

昭和十九年には女生徒は近くの工場へ、男生徒は田無の中島飛行機鍛造工場へ勤労働員に出ていきました。私は中島飛行機の担当だったので、毎朝野方に集合した生徒を引率して、西武電車にのって田無にむかいました。電車をおりと工場まで三十分位歩きました。

昼食当番は、学校に蒸しパンが届くまで待機して、パンを背負って工場に届け、その後作業をしました。土や砂やその他の材料をこねて、飛行機のプロペラの頭の部分の鑄造に使う型を

作る仕事です。作業中に空襲警報がなると、裏山のたこつぼ壕まで走って避難しました。

工場のたこつぼは大きいので、二、三人は入れました。おおもい何もない穴の中に入って、B 29が通り過ぎるのを息をこらして待っています。隣の武蔵野工場に爆弾が落ちるのを震えながら見ました。鍛造工場を素通りして武蔵野工場の方をねらったのでしょうか。勤労働員の生徒にも犠牲者が出たということです。警報が解除されると、工場へ戻って作業を続けました。

夕方、生徒をつれて野方に帰るのですが、西武電車の線路が爆弾のために寸断され電車が動かないので、田無から歩いて帰ったことがあります。線路に沿って歩くのですが、爆弾で道に大きな穴ができて水道がふきだして溢れ、通れなくてまわり道をして、夜十二時過ぎに野方へついたら、校庭には心配した親たちが集まっておりました。

兵舎となった学校

勤労働員で生徒のいなくなった校舎に、大阪の部隊の兵隊が駐屯してきました。天井板も教室や廊下の羽目板も焼夷弾にそなえて取りはらわれてしまいました。学校のまわりの家は強制疎開ということで、いやもおうもなく取りこわされてしまいました。校庭にはたくさんのたこつぼ壕が掘られ、裏の山脇別荘の敷地には大きな横穴防空壕ができました。各教室は兵隊の宿舎に使われましたが、兵隊がどのような生活をしていったか、勤

労働員で学校にいなかったせい、記憶に残っておりません。

終戦になって兵隊が引きあげたあとの校舎は、荒れ果てたあばらやのようでした。新築して生徒が引越してきてから、三年もたっていなかったのです。何か月かだいたい日が過ぎた頃、床下から白骨がでたとか、夜中にだれもいないのにピアノの音がきこえるなどと、まことしやかな噂が流れました。白骨は、牛を殺して兵隊たちが食べた骨が捨てられてあったのだということです。

集団疎開

昭和十九年八月に、六年生の長男と五年生の長女が、北原国民学校の疎開地の福島県江名に集団疎開することになりました。

その頃は純綿が手に入らないので、祖父の紋付羽織をといて防空頭巾を作りました。二人のリュックサックの中には、イーストでふくらませた手製のパンや、さつま芋をうすく切って干して粉にひいて作った餅だの、大豆を煎ったもの、肝油など家中ありつたけの食物をつめました。つぎの当たったズボンをはき、紋付の防空頭巾をかぶって緊張した顔つきの長男と、遠足にいく時のようにはしゃいでいる長女は、戦闘帽をかぶり、カーキ色の国民服を着た先生に引率されて出発しました。校庭で涙をぬぐっている母親もおりました。子供たちを見送って一人になった私は、子供も親も明日の命の保証されていない状況の中で、心細さと悲しさで、泣きやむことを忘れたように泣いておりま

した。

子供たちはよく手紙をくれました。絵入りの手紙を大切に読むてあります。夕飯のすいとんのだんごの大きさとか、いくつ入っていたとか、山へ薪拾いにいったとか、炭焼小屋へいって炭炭を運んできたとか、山から見ると、小名浜の海が埋まるほど軍艦がきていたとか、疎開地での生活がよくわかりました。

面会は切符の割当があつて自由にはいきませんでした。保存できる食物はとっておいて面会の時もっていききました。子供たちはやせているのはもちろんで、おできができました。子供がついたりして親たちを心配させました。長男が六年を卒業して中学に入った時、妹も一緒に帰京させました。